ベルクソンの時間論とダンスの発生

北村明子

「ダンスとは何か」というあらゆる人によって投げかけられてきた疑問。

舞台上でのダンスを観るとき，私たちはダンスをどこに観ているのか。ダンスはダンサーの身体上だけに生じるのではない。観客はダンサーとダンサーの間に，オブジェとダンサーの間に，時にはダンサー不在の空間にもダンスを感じとる。ダンスを感じ取る，ダンスを体験する，ダンスが生じるとは一体どのようなことなのか。

ダンスをひとつのジャンルとして捉えるならば容易にそれらの「設定」を捉えることができる，例えばバレエの場合，ピルエット，アラベスク，アティトュード，というようにそこにはそれがバレエだと知ることのできる，観客とダンサーに共通の身体の「言語」がある。あるいはシャーマニスティックな祭儀の場で行われる「踊り」は，予めその「場」についての共通認識があるために，あるいはモダンダンスなどの「公演」は予めその「ステージ」でなされるものがダンスであるという一種の「宣言」によってそれがダンスだという「設定」を伝える。「ダンス」というラベルを貼ってしまえばその場で何をしようとそれはダンスだということができる。しかし，ここで問題としようとするのはそのような「ダンス」ではない。何かの前提もなく，ある身体の運動に直面する時，「これはダンスだ」としか言いようのない身体の運動が確かに存在する。言語ならざる声，全く意味のわからぬ他者の声でコミュニケーションが成立しうる瞬間が確かにあるのだ。

ここで，「ダンスとは何か」という問いから「これがダンスだと呼びうる身体の運動はいかなるものか」というものへとシフトしたい。前者の問いが「ダンス」というものの存在に対する問いかけを含むものであるならば，後者は「ダンス」という存在を既に前提にしているものである。前者の問いは「ダンスが存在するとは何か」，「ダンスが存在することはどういう意味を持つのか」というものであるのに対して，後者の問いは「ダンスが発生する条件は何か」という意味合いを含んでいる。ではそのような「ダンスの機能」，「ダンスの発生論」を考える際，それに至る前提は何であろう。改めてそれら前提を証明不可能ではあるものの，ここでは自明性をもつ「公理」的なものとして挙げると，以下のようなものになるだろう。

①ダンスは外的条件によらず自立的に存在する
　ダンスの存在は重力の存在が自明であるように物質の存在が自明のものであるように明らかなものである。

②ダンスは身体と時間を必要とする
　身体と時間が関係を結ぶとき，それを身体の運動と呼ぶ。

これらのことを前提とした上で，ベルクソンにおける時間について考察し，記憶とダンスの関連性，ダンスの時間について探っていきたい。